

『不埒なスペクトル』

著：崎谷はるひ

ill：タカツキノボル

「お待たせしました。お手前、失礼いたします」

「ああ、こちらに——」

テーブルに拡げていた書類を片づけ、ふっと顔をあげた直隆は、そこで硬直する。

「あ」

トレイを持った相手もまた、小さな声をあげたきり、固まった。

直隆は、考えるよりも早く立ちあがり、威嚇するように彼を——『マキ』を見おろした。

この店はとくに制服などはないようだが、カジュアルなシャツの胸元にあるネームプレートには『名(な)執(とり)真(まさ)幸(き)』の名が記されている。

とりあえず、ひとつ情報を得た。にやりと唇を歪め、直隆は尊大に顎をあげて名を呼んだ。

「ひさしぶりだな、名執くん」

「ああ、ははは。どうも、おひさしぶりです、真野直隆さん」

真幸はそう言うなり、冷たい笑みを浮かべたままグラスと皿をテーブルに置いた。その間、直隆との視線ははずさないままだ。

びしびしと火花が散るなか、未直だけが不思議そうに小首をかしげて驚いている。

「えっと……兄さん、知りあい？」

いかにも遊んでいるふうな真幸のルックスと、お堅い兄の姿を見比べる弟は、いったいどういつながりがあるのかと怪(け)訝(げん)に思っているらしい。問いには答えず、直隆は真幸を睨みつけたまま、冷ややかな声で言った。

「未直、悪いがちょっと、さきに食事をしていてくれないか。わたしは彼と話がある」

「え？ う、うん。わかったけど、兄さんは？」

未直が問いかけると、マキ——真幸は、はっとした顔になった。意味のわからないその表情にはかまっていられず、トレイを手にした彼の手首をきつく握る。

「あとで食べる。……来てもらえるだろう？ 名執くん」

逃がすものかと力をこめると、なぜか真幸は怯えるでもなく、素直にうなずいてみせた。

\* \* \*

この状況で話し合いに適した場など思いつかず、とにかく腕を掴んで店を出た直隆は、ひとまず店の裏手に足を踏み入れた。

ひと通りのない薄暗い路地には、ポリバケツやビールの空き瓶などが並んでいる。

行き止まりのフェンスがある、奥まった場所に来ると、直隆は「このあたりでいいか」と足を止めた。振り返り、なにを思うのかおとなしくついてきた真幸を睨みつけると、彼は小首をかしげてみせた。逃さないように、腕は掴んだままだ。

「ものすごい偶然もあったものだな」

「あは、うん。俺もびっくりした」

剣(けん)呑(のん)な顔の直隆に対し、真幸は軽薄な表情でへらへらと笑ったままだ。そのことにもいられちを覚えながら、直隆は尋問でもするような口調で問いかける。

「きみはあの店でアルバイトをしているのか」

「そうだけど。なあに、身上調査？」

茶化してみせる真幸を睨みつけ、直隆は彼を捕らえたのとは逆の手を突きだし、押し殺した声で言った。

「携帯を出せ」

「なんでよ」

「いまなら、警察にも行かないで置いてやる。だからあの写真を消せ。わたしの目のまえで」

逆らうようなら、出るところに出る覚悟はある。目顔でそう告げると、真幸は冷やかな目に嘲笑を浮かべてみせた。

「警察に行って、なにすんの？ 男に犯されましたって言うの？ 体裁悪いよねえ」

そんなことできつこないくせに——と、真幸はあざけるような顔をする。だが直隆は、しごくまじめな顔でうなずいてみせた。

「必要とあらば、そうするしかないだろうな。あのあと、一応調べてみたのだが、きみがわたしに対して行った行為は、拘束しての強制的なセックスということで、逮捕・監禁罪か強制わいせつ罪に相当するだろう」

真幸は意外な言葉を聞いたかのように、「は？」と目をまるくした。かまわず、直隆はさらに言葉を続ける。

「ちなみに、例の写真を悪用し、こちらに対してなんらかの要求をしてきた場合には、脅迫罪もくわわるので、かなり厳しい罰則がつくが、それでもいいと言うなら——」

「えっ、ちょっ、待って。あんた、マジで？」

「非常にまじめに話していることだ。そうした罪状がいやなら、いますぐに写真を」

「じゃなくて、ホモに犯されたって、あんたも言われるんだよ。それでも警察行く気満々!？」

本気で驚いているような真幸に、直隆はだんだんいらいらしてきた。こちらがこれほど親切に、ことを荒立てないでやると言っているのに、なぜそれがわからないのだ。

「だから、さっきからきみが写真さえ消せば、警察には行かないと言っているだろう。飲みこみの悪い男だな。これだけ譲歩しているのに、なぜ素直に聞けないんだ」

「いや、そこじゃなくってさあ。あんた、俺になにされたか、言わないといけないんだよ!？」

「当然だろう。被害届けも出さずにどうすればいいというんだ」

「じゃなくて……恥ずかしくないの」

どうにも話が噛みあわない気がして、直隆はますます顔をしかめてしまった。穏便にすませてやると言っているのに、なぜ言わずもがなのことばかり、真幸は繰り返すのだ。

「しかたあるまい。いい歳して酔っぱらい、はめられたことについては我ながら情けないと思うし、恥でもあるが、被害届を出す際には、詳細を語らねば意味がない」

「え……恥ずかしいのって、そこ……？」

ぽかんとしたような表情の真幸に、直隆は「むろんだ」とうなずいた。

「酒量もわきまえず、人(じん)事(じ)不(ふ)省(せい)に陥(おちい)るなど、いい大人がすべきことではない。ましてやトラブルに巻きこまれたのは自業自得でもある。できればことを荒立てたくもない。だがきみはわたしを脅している。そうした不安材料は、話しあい取り除かれるならそれに越したことはないだろう」

真剣に言ったのだが、真幸はもはや啞然とした表情で、奇妙なものでも見るかのよように直隆を見ていた。そして、掴まれたままの自分の腕に視線を落とす。

「ていうか、気持ち悪くないの」

「なにがだ？ さっきから、きみは話を逸らしてばかりだ。結論はふたつにひとつしかないのだから、さっさと——」

言いかけたところで、突然腕を引っぱられた。よもや暴力に訴える気かと、見当違いの方向に身がまえた直隆は、不意打ちに奪われた唇に啞然とするしかない。

「なっ、なにをする!？」

ちゅっと、音を立ててすぐに離れたキス。やわらかく乾いた感触は、あの日にはいちども知らないままだった。焦って手の甲で口を庇うけれど「遅いよ」とおかしそうに真幸は笑った。

「もっかい俺と寝て、満足させてくれたら、消してあげてもいいよ」

「……は？」

真幸は直隆の肩に手をかけるようにして顔を近づけ、にやりと笑った。その笑みは、さきほどまで浮かんでいた、嫌味なものではない。だがなにか企んでいるような気配はする。

あげくの果てに、真幸が口にしたのは、直隆にとってまったく意味のわからないことだった。

「だからあ、俺ともういっかいセックスしたら、目のまえで消してあげるつつてんの」

直隆は顔をしかめ、いったいなにを言っているのかと、頭ひとつほど背の低い彼をうるんな目で見おろす。けれど、彼の表情は依然、にやにやとしたままだ。

「穏便にすませたいんでしょ？ 警察沙汰は俺もごめんだし、おにいさんもいやだよね？」

「まあ、そうだな」

「じゃ、寝てよ」

わざと軽薄に笑う彼の言葉を信じるに足る要素など、なにもなかった。腹立たしく、不愉快で、あっさり奪われた唇に残るあまさえ、いらだちを誘う。

「交換条件はそれか？ なんのためにだ」

「んー、おにいさん、いいモノ持ってたし？ 俺、最近、男日照りだったし、こないだのエッチ、よかったし」

するりと、細い指が頬を撫でる。眉をひそめはしたけれど、不愉快ではない。むしろ、誘うような手つきに妖しい疼(うず)きを感じ、内心で焦ったほどだ。

「もう縛らないから、俺のこと満足させてくれたら、消すよ」

ふふっと笑う声や唇も、妖(よう)艶(えん)、とわいていいほどなまめかしい。一瞬覗いたピンク色の舌が、あからさまというほどでもなく、けれど男の気をしっかりと惹(ひ)く感じに唇を舐める。

「ギブアンドテイクというわけか」

ため息をついて、直隆はこみあげる不可解な熱を表に出すまいとした。そして、条件

をつけてきたことで、むしろ納得したとうなずいてみせる。

「わかった。二言はないな？」

「え……まじで？ いいの？」

真幸は、またもやびっくりしたように目をまるくした。わけのわからない男だ。脅迫してくるくせに、こちらが条件を飲めば驚いて、直隆には意味不明の確認ばかりを口にする。

白黒はっきりつけたい性格の直隆にとっては、いらだたしい話だ。

「で、いつだ。今日か？」

「えー、いや、そうくるんだ……わっ」

直隆は、密着した細い腰に手をあて、ぐいと引き寄せた。細い背中がしなり、驚いたような顔で見あげてくる真幸を睨みつける。

「すればいいんだな？」

「ん……っ」

してやられてばかりなのは業(ごう)腹(はら)で、一瞬たりとも目を離さないまま、噛みつくようにキスをした。とたん、またもや真幸は目をしばたかせ、呆然としたような顔をしてみせるから、意味がわからない。

「自分でしろと言ったんだらう。なぜ驚く」

「え、え、まあ、そうなんだけど」

こんなところでキスするなんて——だとか、ごにやごにやとつぶやく真幸に、直隆はますます表情を陰しくした。

「どっちなんだ、わたしは抱けばいいのか、しなくていいのか。はっきりしなさい！」

「えっ、あっ。じゃ、じゃあ、して」

じゃあってなんだ。煮えきらない真幸に、直隆はなぜ自分が主導権を取っているのか、と内心で首をかしげたが、すぐに答えは見つかった。

かつての婚約者には、やつつけ仕事とまで罵られた。それが、犯罪者まがいに脅してきている相手にとはいえ、『よかった』と言われたことで、直隆の、このところズタボロだったプライドが——くだらないとは我ながら思うが——ほんのすこしとはいえ、癒されたからだ。

そもそも、相手が男だという点については、いまさら考慮すべきではない。すでにいちど、強制的にとはいえ寝てしまったのだし、可能か不可能かといえ、できるに決まっている。

(なのにいちいちぐずって、本当はどうしたいんだ、こいつは？)

直隆は、あまり気の長いほうではない。やると決めたものを撤回するのも不愉快だし、そもそもなぜに脅迫者側がしりごみしているのだ。

(それではやっぱり、わたしがよくなかったみたいじゃないか！)

もはや論点のずれた部分でムキになりながら、直隆は思いきり上から言いきった。「いいか、条件は飲む。言(げん)質(ち)も取った。だから終わったら、写真は消しなさい」

「あ、う、うん。わかった」

断言してみせると、勢いに吞まれたのか、戸惑ったような顔で彼はこくりとうなずいた。

本文 p79～88 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>